

1993年度下半期報告

1. 個人山行（巻機山・米子沢） 10月9～10日 参加・寺島、古瀬、田形、瀧沢

10月9日（曇り） 上野→六日町→清水→ゴロー帯
駐車場までタクシーで行くが、運ちゃんに迷われてしまう。こちらに道を聞かれても困る。駐車場から堰堤をいくつも越えて、30分ほど行ったゴローの左岸にちょうどツェルト2張り分のスペースがある。久々に大きな焚火を起こすが焼き鳥には火が強過ぎた。

10月10日（ガス後晴れ）→米子沢→巻機山→清水→六日町
朝はガスされるがすぐ晴れる。下流部の木々の真っ赤な紅葉がガスの中から現れる。大きな滝についている巻き道はいずれもはっきりしている。ザイルは一度も使わない。源頭部で完全に晴れ、下りでは紅葉が気味悪いくらい鮮やかだ。この山の紅葉はものすごい（文責 古瀬）。

2. 冬山偵察（北ア：燕～槍ヶ岳） 10月16～18日 参加・寺島、古瀬

10月16日 穂高→中房温泉 6:15→燕山荘 9:25、発 10:20→大天井岳 13:20→大天井ヒュッテ 13:55
合戦小屋のすぐ上が森林限界で、燕山荘直下に雪崩危険箇所があるが今は雪も無く主稜線に着く。寺島のみ燕岳を往復し、大天井岳へ向かう。蛙岩は5mほどのギャップで鎖がついている。大天井の登りはのっぺりしたガレの急斜面。ヒュッテの冬期小屋は快適。

10月17日（快晴のち雨） 出発 5:55→ヒュッテ西岳 8:45、発 9:10→槍の肩 12:40→千丈沢乗越 13:10→槍平小屋 14:55
赤岩岳の登りは20mほどの急登で始まる。天上沢側はすっぱり切れ落ち、二の沢側は雪崩やすそう。稜線すぐ下のハイマツをこいでいくつかの小ピークを巻きぎみに行く。踏み跡と残置ロープが所々にある。この核心部は距離もあり、常にザイルを要するようなナイフエッジになりそう。西岳からの下りも急でなおかつ分かりづらい。東鎌のはしごの先は割合尾根も広くなり、槍の黒い穂先がぐんぐん近付く。しかし槍の穂には実は既に薄く氷が張っており、ザイルもアイゼンも持たずに出掛けた我々はすげなく追い返された。千丈乗越からは怪しげな踏み跡をたどって中崎尾根を行き、緩くなった所でちょっとしたヤブをこいで飛驒沢に下る。

10月18日（晴れ） 出発 5:35→新穂高温泉 8:05→平湯→中の湯→新島々
初めて見る穂高の飛驒側は、信州側と雰囲気が全く違っておもしろい。出合から見上げると北穂滝谷は、灰色の岩に白く氷がついて、一層壮絶な姿を見せている。また、穂高平はのんびり牛が草をはむ牧場で、小屋にはソファがあったりして避難小屋とは思えないゴージャスなものだった。新穂高で紅葉を見ながら温泉に使って見知らぬおやじと話しこむのもおつなものだ。このコースは実力不相応ではないかとの声もともとあり、我々も偵察を通してそれに納得した。そのため冬合宿は白紙に戻し、検討し直した結果、五竜～唐松と言う案が浮かび上がった（文責 古瀬）。

3. 春山偵察（尾瀬：大清水～尾瀬沼～燧岳～尾瀬ヶ原～鳩待） 10月23～24日 参加・古瀬

10月23日 大清水（晴れ） 11:35→三平峠 13:05→沼尻 14:00→燧岳 15:35→見晴 17:10（雪）
途中でくるぶしを痛めながらも何とか燧岳にとりつくが頂上で急に雷とガスとアラレの3段波状攻撃に遭い、身の危険を感じながらハイマツ帯めがけて駆け下る。見晴では積雪10cmに達して

いた。ほんの何時間か前は紅葉の中のハイキングだったのに、、、。

10月24日 出発 8:10(雪)→山ノ鼻 10:45→鳩待峠 12:30

痛みはひかず、ハイカーのおばちゃんに抜かれながらとぼとぼと歩く。予定では鳩待峠から至仏に登り、笠ヶ岳を通過して湯の小屋へ降りるコースだったが、吹雪の鳩待峠からバスに乗る。形だけの偵察になってしまったことに反省。この山行は春合宿サブ案の偵察であったが、サブ案のコースは大部分がトレースできない地域にあり偵察山行の役割はもともと小さく、さらに諸事情によりほとんど意味の無いものになってしまった(文責 古瀬)。

4. 春山偵察(火打、妙高) 10月31日～11月2日 参加・古瀬、澁沢

10月31日(曇り) 登山口 10:35→富士見平 12:00→高谷池ヒュッテ 13:45

バスの終点からまだかなり歩かなければならなかったのが、道行く車に同乗させてもらう。急登を過ぎてから雪が多くなる。ヒュッテまではトレースがついており問題無い。6テンに2人で寝るのは恐ろしくさむい。

11月1日 →火打山 12:45→テン場 14:00

ガスっているが出発。昨日とは打って変わってラッセル。火打から先は分りやすい尾根で、踏み跡らしきものもある。影火打のあたりは良い天気である。いよいよキレットまでの急降下が始まる。北斜面はすっぱりと切れ重荷にはいやなところだ。本番ではザイルがいるかもしれない。焼山は下部に来ると上の方がよく見えないが、斜面に突き出た岩を避けて登り始める。急で滑りやすく、草をつかみながら登るところもあった。2つ赤布を付け引き返す。上からだ突き出た岩が見えないので、どうやってこんなところをスキーで滑ったのだろうと思いつつ慎重に下る。少し晴れ間が出て、阿弥陀や烏帽子が見える。雪を全然かぶっていなかった。火打に戻る頃には雲が厚くなる。

11月2日(晴れ)起床 4:35、出発 6:30→黒沢池 7:15、登 7:35→大倉乗越 7:50→妙高山頂 10:00、登 10:50→光善寺池 11:50→燕温泉 13:35

高谷池を取り囲む山々が朝日を浴びて金色に染まり、遠く白馬の純白の稜線が空に浮かび上がる。さわやかな空気の中を出発。この日も一日誰にも会わない静かな山行となる。黒沢池からの急登がきつい。大倉乗越からは斜面をトラバースしながら妙高取付まで下る。雪が付くと雪崩そうである。妙高の登りはひたすら急登。胸着くようなジグザグの斜面を抜けると、一気に山頂に立つ。360度の見事なパノラマ。声の届きそうな外輪、日本海へと続く山々が青くかすみ、おもちゃの様な街並みが見える。たっぷり景色を満喫しつつ、スキーを担いでの本番への不安も口にする。赤倉付近は瘠せ尾根で急そう。

妙高の下りはゴロゴロの岩場に始まる。あまり雪はつかないのだろうがいやらしい。鎖場一枚岩にはちゃんとツボが掘ってある。最初の急斜面を過ぎると、ジグザグの斜面を一気に下り、スキー場の上に出る(文責 澁沢)。

5. 冬山偵察(遠見尾根より五竜岳往復) 10月31日～11月2日 参加・寺島、田形

10月31日(日) 神城→アルプス平 8:45→小遠見 10:05→西遠見 12:00→五竜山荘 15:20

月見の宴の疲れを引きずりながらテレキャビンの駅まで歩く。アルプス平からさらにリフトに乗り継ぎたいところだが運転していないので雪の無いゲレンデをひたすら登る。当初は昼過ぎには

五竜山荘に着いて、この日の内に五竜往復するのは余裕かと思っていたのだが、大遠見のあたりから雪積が目立つようになる。ラッセルは深いところで膝下まで有って、雪がしまっていないのでしんどい。結局、山荘に着いたのは3時過ぎ。稜線は猛吹雪のため、山荘にぴったりと寄せてテントを張る。

11月1日(月) 吹雪のため沈殿。朝、晩とも具なしラーメンの惨めな食事。

11月2日(火) 7:00 発→五竜岳 8:50、発 9:40→五竜山荘 10:15、発 10:40 →大遠見 13:20
→アルプス平 14:20

一夜明けて快晴。アイゼンを付けて出発。夏道沿いにまめに写真を撮りながら進む。特に危ないところも無く頂上へ。眺望を堪能してから引き返す。白岳の下りは雪が腐っていて歩きにくかったが、それ以外、特に問題無くアルプス平に着く(文責 寺島)。

6. 丹沢 11月27～28日 参加・古瀬、淵沢、吉武

11月27日 富士見山荘発 10:25 →二の塔 11:13、発 11:37→三の塔 10:47 →行者岳 12:25→新大日頭 13:17、発 13:30→塔ヶ岳 14:00

私にとっては山岳部での初めての山行だった。前日は興奮して？なかなか眠れず、寝不足での出発である。電車とバスを乗り継ぎヤビツ峠に着く。上級生はそこで靴を履き替え、私はかかとにテーピングする。そして出発。舗装された道路を少し下って行くと富士見山荘に着く。そこで荷物を降ろし少し下の水場まで水を汲みに行く。名水だったか、7～8人の人が車で来ていた。戻って再びザックをかつぎいよいよ山道らしい道を歩き始める。階段状の急登が始まり苦しい。中くらいの大きさの石がごろごろしている所に金網をかぶせたところもあった。あとは記憶に無い。たぶん同じように階段がたくさん続いていたのだろう。それから二の塔に着いた。富士さんが見える。二人づれの女性が登って来て富士山をバックに記念写真を撮っていた。山に登るのは久しぶりだ。塔の岳の登りは嫌なところだった。赤土の斜面に師が転がっている。登りはたださえきついの、ふくらはぎに乳酸がたまり足が重い。頂上は割合広く人がたくさんいる。鹿もいた。また何かの工事をしていて。テントを張れないので上級生は場所を探しに行った。11月も末になると山の上は本当に寒い。あまりに寒いのでその間小屋の入口に入って待っていた。しばらくすると戻って来て一緒に水場に行くことになった。ずいぶん急なくだりである。その上あまりしまっていない赤土の道だった。下りながら明日の朝またここを登るのかと考えてちょっと嫌になった。下りきると木のテーブルが一つある。ここもテントを張ってはいけならしい。上から水を汲みに人が降りてくるたびにひやひやした。ここからも富士山が見える。まだ八合目付近までしか雪が付いていない。さて、夕食の準備に取りかかったのだが寒くて手がかじかみ、野菜の皮むきがうまく行かない。風が強くて火がつかないのでテントに入る。テントの中で火をつけてもいいのだろうかと思った。洞窟の中での様にヘッドランプを頭に付けて調理した。今日のメインは肉じゃがだそう。材料を鍋でいためるので油煙があがる。そのむっとする油煙とジャーと材料を炒める音。ヘッドランプの明かりと肉じゃがの色の記憶だけが浮かぶ。人の顔は浮かばない。眠い、眠い。夕食はとてもおいしかった。山の上でこんな料理が食べられるとは幸せである。もういい加減眠い。すると上級生が目をつぶれと言う。つぶっていると何かごそごそ音がする。眠い。もういいよと言われて目を開けてみると目の前に苺の乗った丸いケーキが有った。明日は私の誕生日だったので、在京の寺島さんが差し入れてくれたのだった。こんな丸い壊れやすいものが山の上にあるなんて変な感じがした。だからザックを横に倒さなかったんでしようとして上級生が言っていた。そして歌を歌ってもらいローソクの火を消した。眠い。急いでシュラフにもぐり込んだ。

11月28日(土) 起床 6:00、出発 7:00→塔ノ岳 7:18→丹沢山 8:10→休息所(水汲み) 9:00
→蛭ヶ岳 9:50、発 10:20 →姫次 11:15、発 11:35→八丁坂の頭 12:15 →東野 13:45

朝起こされた。上級生はもう起きて火をつけようとしている。なんとなくまわりに眠気がたれこめている。するといきなりブスが火を吹いた。大慌てで上級生二人はその火を消す。が、それも一瞬のことで無言の内にまた朝の準備を続けている。7時発。思ったとおり急な坂を登り返して小屋に戻る。それから小屋の左を通って蛭ヶ岳の方へ行く。あたりはガスっていて冷たく重い空気が朝らしい。山では朝が早い。他の登山者たちももう動きだしている。蛭ヶ岳に着く前か後かは忘れたが鎖の付いた岩の道があった。こう言うところは荷物を持って歩くのは怖い。つつい腰が引けてしまう。あとは途中で水の通ったあのような石が転がっている急な細い道を下ったことしか覚えていない（文責 吉武）。

7. 富士山雪上訓練 12月4～5日 参加・寺島、田形、古瀬、澁沢

12月4日（曇り）富士吉田駅発 6:10 →馬返し 8:10、発 8:40 →2合目 9:20、発 9:35 →五合目 11:20 →7合目 雪訓 13:20～15:15 →テン場 15:50

下級生のいない雪訓。風邪をひいた寺島の体調が悪く、テントキーパーとなる。今年は去年より雪が少なく、所々地面の見えるところでピッケルストップの練習をする。

12月5日 起床 4:45、出発 6:10 →7合目・雪訓 発 13:50 →テン場 14:20 →馬返し 15:20 →中の茶屋 16:10 →富士吉田 17:20

今日も寺島はテントキーパー。7合目に着いた早々、古瀬のアイゼンが壊れる。針金で応急措置。7合目は人が多く、少し上に上がってからスタンディングアックスの練習をする。自己脱出に至って、ようやく「訓練」している気分になる。時間が無く、追われるように下山。今年も山頂に行けなかった（文責 澁沢）。

8. 冬山（遠見尾根～五竜～唐松岳～八方尾根）12月16～20日 参加・寺島、古瀬、田形、澁沢

12月16日（木）神城→アルプス平 8:53 →一の瀬 10:45 →小遠見 11:35、発 12:00 →中遠見 13:30 →大遠見 13:50 →テント場 15:00

リフト降り場からすぐにラッセル。心配していたトレースも無く腰まですっぽりとうまるラッセルを楽しむ。天気は登り始めは良く、展望がきいていたが、昼過ぎからガスが出始め、今一つ進み具合が分からないまま3時で行動をやめる。

12月17日（金）吹雪のため沈殿

12月18日（土）出発 7:30 →西遠見 8:30 →白岳 13:15 →五竜山荘 13:30

ガスっていると言う以外問題は無いので出発。ひたすらラッセル。登るにつれますます視界がなくなっていく。白岳の登りは、しの竹を連打して雪庇を慎重によけながらこれもラッセル。吹雪の主稜線に出る。少し手間取ったが五竜山荘への下り道を見つけて駆け下り、小屋脇に設営。夜中、麓のスキー場の明かりが奇麗に見えた。

12月19日（日）出発 7:20 →五竜岳 10:35、発 11:05 →五竜山荘 13:20

快晴。前日に打ったしの竹が遠見尾根上にきれいに並んでいる。写真を撮ったり、なんやかんやしてアタック出発が遅れる。G2の岩峰は夏道通しにトラバース。しかし、予想以上に雪がついて凍っていて、またザイルの支点も得られなかったため、夏道途中からルンゼを詰めて稜線に出る。この時、ザイルを2ピッチ半使う。稜線上は雪がうまい具合について見た目ほどは岩々しておらずノーザイルでそのまま頂上まで。眺望を楽しむ。この日に唐松まで行くには帰路は急ぐ必要があるため夏道通しに下ることにする。が、この判断は悪く、結局、適当な支点が得られず、稜線に戻ることになった。往路で直上した地点までゆき、ここを下らずに、稜線上をザイル

2ピッチ張る。この部分、日光が直射するため、岩は凍っておらず脆い。結局中途半端な時刻に五竜山荘に帰り着く。

12月20日(月) 出発 6:50 →大黒岳手前 8:30 →唐松岳 13:50 →丸山ケルン 14:30 →八方池山荘 16:00

二日続きの快晴。唐松へと向かう。大黒岳の登りはラッセルがしんどい。牛首の肩からは岩場が続き、不慣れな我々はザイルをべたべた張ることになり、加えて、誰かしらのアイゼンが壊れたり、外れたりしたので予想以上に時間がかかった。唐松山荘に着いた時には既に1:30。頂上往復後、下れるところまで下ることにする。ところが八方尾根は下り始め以外は全てクラストしててくるぶしまでも潜らない。下山と言うことで皆頑張ったこともあいまって、日暮れ前に八方池に着くことができた。ロマンスリフトは休業のため、リフトの下を最後の力を振り絞り終了時刻間際のアルペンリフト乗降口まで下った(文責 寺島)。

9. 八ヶ岳中部 1月4～6日 参加・古瀬、湧沢、吉武

1月4日 渋ノ湯発 12:00 →ケルン 13:55 →高見石 15:00、発 15:55 →白駒(青苔山荘) 16:40
私を含めて2人が遅刻しバスに乗り遅れる。リーダー怒る。なんと雪がある。今年初めて雪を見る。そこでスパッツを付けピッケルを持って出発。2回目にして初めての冬山だ。つるつる滑って登りにつく。一人アイゼンをはく。ところがなかなか靴がはまらない。15:00高見石に着いてテントを張るが小屋の人が白駒まで行くように言うので仕方なく撤収して下る。

1月5日 起床 4:30、発 6:35 →麦草峠 7:13 →大石峠 7:25、発 7:35 →縞枯山荘 9:45 →北横岳ヒュッテ 11:20 →北横山頂 11:40 →大岳との分岐 →双小池 14:05
双小池の小屋に泊まる。小屋は寒い、テントの方が良かった。

1月6日 起床 5:00、発 7:00 →亀甲池との分岐 8:25 →蓼科山との分岐 10:55 →車道 12:25
→ロープウェイ入口バス停 13:25
踏み跡が無い。そして膝丈のラッセルが始まる。それで時間が無く、蓼科へは行けなかった。車道に降りて道を下る。肩にザックの紐が食い込む。ピラタス・ロープウェイ入口に着いて終わり。

10. プレ春合宿(吾妻天元台、磐梯山～雄国沼) 2月22～28日 参加・古瀬、湧沢、吉武、田形

2月22日 米沢 → 白布温泉 → 天元台
前夜の内に米沢入りしているはずだったが、風で東北線が止まり、3人は新幹線で深夜に着き、その頃某リーダーは3時間電車で缶詰になった挙句、黒磯の駅で寝ていた。波乱の幕開け。ロープウェイは何とか動いたが、天元台に着くと駅から一步も踏み出せないような猛吹雪。早稲田の事故の原因となったこの低気圧は、その後も猛威を振るい、我々の山行を悲しいものにした。

2月23日 沈殿
前日と全く変わらず。いくらスキー場とは言え1年生を連れて行きたくはない。その辺で雪洞を掘ることにする。天井に穴が開いたり、藪が出てきたりもしたが3時間で仕上げる。寝心地は「・・・」。それにしても彼(低気圧)は何が楽しくてこんなに荒れ狂うのだろう。

2月24日(快晴) 出発 7:20 →北望台 9:40 →中大嶺 11:10 (雪) →テン場 13:30 雪訓後幕
営
朝起きると天井が目の前にあり入り口が無くなっていた。焦って飛び出す。時折晴れ間も見える

ような天気、主稜線を目指す。北望台から上は樹林帯でひどいラッセルを覚悟したがたいしたことは無かった。しかし登るにつれ天気は昨日に逆戻りで、だだっ広い中大嶺では視界が悪く、この日にデコ平へ抜けるのは諦め、ピーク下の樹林帯で泊まる。

2月25日(雪) 出発 8:40 → 天元台 10:15 (快晴) → 白布温泉 → 米沢 → 猪苗代

天気の回復を待つがむなしく下山となる。スキーを持つ古瀬、沢沢は練習を兼ねて降りる。白布温泉は落ち着いた風格のある良い温泉。米沢で買い出し後、猪苗代へ行きステーションビバーク。

2月26日(曇り) スキー場発 9:40 → 赤埴山下 10:35、発 10:55 → 弘法清水手前 11:45 → スキー場 (13:10)

田形と吉武に見送られ出発。1317mまでは立ち木をぬって進む急登で、慣れないスキーでは時間がかかる。早くも古瀬のシールがはがれ、処置に手間取る。沼ノ平はだだっ広い雪原で、しの竹を打ちながら進む。弘法清水に向かう急斜面は凍っていて、シールを限界まで利かせながら慎重に登る。途中でたまりかねた古瀬は、両手でスキーを持って登った。稜線に出ると強風が吹きつけ、ガスも濃くなってきたことから、引き返すことにする。アイゼンを着けてあっという間に下山。登りの苦労が空しくなる。たっぷりスキーを楽しんだ二人を迎えにグレンデに向かう。滑りやすそうなスキー靴がうらやましい。

2月27日(曇り) 起床 4:30、出発 6:30 → 弘法清水発 8:55 → 磐梯山 9:30、発 9:50 → 弘法清水 10:10 → 中ノ湯 12:00、発 12:20 → 八方台 13:00、発 13:15 → テン場 14:00

1312m 田形、吉武と別れ、昨日と同じルートに行く。稜線に出ると弘法清水までは広い雪原になり、濃いガスの中で現在位置が正確に把握できなくなってしまった。荷物をデポして少し歩きまわる。沢沢は変な勘違いをしており、古瀬の予測に従ってしばらく行くとすぐに小屋が見つかった。しの竹を刺しながら急な稜線に登る。思ったより時間がかかる。磐梯山からはガスしか見えずがっかり。雲の下に出て、近くの山の景色で我慢する。中の湯に向かう稜線をトラバースするが、上にゆきすぎたらしく、急な岩稜でとても無理。すぐ近くにカモシカがいたので写真を1枚とって樹林帯に戻る。1550mを過ぎるとようやくスキーを滑らせることができるようになり、時々転びつつも山スキーらしくなる。八方台にスキーヤーとおぼしき人影が見えた。それもそのはず、西側の斜面にも立派なスキー場ができており、稜線のすぐ下にリフトがある。なんだか妙な気分。猫魔岳に向かう稜線の鞍部にもリフトがあり、スピーカーからの音楽が間近に聞こえた。

2月28日(曇り) 起床 4:40、出発 6:30 → 猫魔岳 7:20 → 1349m 8:40 → 雄国沼 10:40、発 11:00 → 車道 12:15、発 2:45 → バス停 13:45

ガスがかかったパツとしない天気である。猫魔の登りは思ったより急で、スキーでは苦しく、北斜面をトラバースするが、雪が不安定な上、樹林帯がきれて雪崩そうなところに出たので稜線に戻らねばならず、かえって苦労する。猫魔の下りでは沢沢が道を間違え、斜面をトラバースして稜線に戻る。1349mまでは広くて気持ちの良い緩斜面。猫魔スキー場のゴンドラを見下ろしながら休憩を取る。しばらく樹林帯を斜め下に進むと突如視界が開けガスも晴れて来て雄国岳や周辺の山々が一望できた。いよいよ本日のハイライト。とは言え、立ち木が多く、疲労も重なって、華麗にシュプールを描くと言うわけにはゆかない。雄国沼からは所々急な下りはあるものの、後半はスキーが止まりそうな緩斜面で、シールを外して滑り降りた。あとはテクテク車道歩き(文責 沢沢)。

1 1. 八ヶ岳合宿(赤岳南峰リッジ左稜、お鉢周り、阿弥陀岳北稜、縦走) 3月8~15日 参加・寺島、沢沢、古瀬、吉武、山内(OB)

3月8日(山内、古瀬) 美濃戸(雨) 15:30 → テン場(雪) 17:10

まさかまさかの土砂降りの雨。南沢方面に踏み跡があったのでそちらから行ったら、雨が雪に変

わるにつれてラッセルになる。行者まで行く予定だったが途中でダウンしてびしょ濡れのテントを出す。やけになってズブロッカが進む。

3月9日出発 6:15 →行者小屋BC 8:00、発 8:30 →撤退 10:20 →BC 11:00

ワカンが無くラッセルがきつい。文三郎もずっとラッセルで結局取付に着く前に風が強まり撤退。スケジュールの詰まっている山内はどうしても行きたそうだった。BCに帰ってから山のバイルが無いことに気付く。暗くなるころ、食料を満載した涸沢がへろへろになって到着。

3月10日(山内、古瀬) 赤岳南峰リッジ左稜 出発 6:15(快晴)→取付 9:00→赤岳 11:30、発 12:00 →BC 12:40

リッジがはっきりするところまで左にトラバースし、ハーケンを打ってアンザイレンする。チムニー状の岩の下まで山内、古瀬の順で2ピッチ。チムニー状の3m岩は氷が着きやすいが、山内リードで強引に乗越す。その上は問題無く、1ピッチ張った後は駆けるようにピークに立つ。爽快、山内はこの日に下山。涸沢はこの日は休養。

3月11日(古瀬、涸沢) お鉢巡り 出発→赤岳→横岳 13:00 →硫黄岳→赤岳鉱泉 15:30 →BC 12:40

中岳分岐あたりで昨年と同じく強風のため前進をためらうが、昨年より弱く、1年生もいないので進む。一昨年より雪が多く、日の岳を右から巻くときに雪が不安定だったので2ピッチ、奥の院の下りの鎖場の終わったところの5mのナイフエッジで1ピッチ、ザイルを出す。また、鉢岳の諏訪側をトラバースするところもシビアな斜面だった。しかし、核心部ではほとんど風は無く、涸沢のザイルワークもまずまずで安心して行動できた。昼頃寺島と吉武が入山。硫黄で強風に飛ばされそうになっていた我々を双眼鏡でのぞいて楽しんでいたと言う。

3月12日(古瀬、涸沢、吉武) 雪訓・地藏尾根下部、中山乗越(雪)

スタンディングアックスビレイの形は何とかできたが、雪が柔らかすぎてキックステップもピッケルストップも不十分なままに終わった。中山乗越では誰にも見られなくて良かった。どちらも満足な雪訓をできる場所ではなかった。寺島はこの日赤岳登頂後に下山。

3月13日(古瀬、涸沢) 阿弥陀岳北稜 出発→JP→撤退 10:00 →BC→赤岳鉱泉

JPの下まで膝上のラッセルで夏道を忠実に行く。背後にラッセル泥棒が5人ほど。そこから忠実に尾根上を行こうとするが雪積が不安定なのでザイルを出す。核心部に取りつくのに左のブッシュから行こうとするが行き詰まり時間切れ。行者での話し合いで、アイゼン技術、ザイル操作以前の問題としてルートミス、勘違いなどの積み重ねによるザイルを結びあう上での信頼関係の薄さ、判断の未熟さ、計画段階から引きずって来たある種の疑念(昨年行った所・・・事実上は失敗・・・だから行ける、という判断に対して)が浮かび上がり、阿弥陀北稜は断念する。

3月14日(古瀬、涸沢、吉武) 縦走 出発 6:05→硫黄岳 10:00→夏沢峠 11:15→根石岳 13:50 13:50 →夏沢峠 14:45

硫黄岳の手前でアイゼンをつけるのに手間取る。夏沢峠の手前から根石山荘まで樹林帯で、天狗はカットし、本沢温泉へ下ることにする。

3月15 出発 5:45→本沢温泉 7:10→稲子湯 10:00 →バス停 12:00 →松原湖

下り始めは樹林帯だが非常に急で、雪は締まっておらず、日の出前に何とか通過する。途中から沢に降りるが吉武がなかなか進まずひやひやする。本沢温泉には人がおり、その先は立派なシラビソ林の中にトレースがある。しらびそ小屋は冬山の緊張と、シラビソ林の包容力が入り交じった雰囲気の良いところだった(文責 古瀬)。

1 2. 春合宿（至仏）3月25～31日 参加・古瀬、洩沢

3月25日（雪） ゲート出発 9:55→津奈木橋 11:55→鳩待峠 15:15、発 15:25→山の鼻 17:25
 だらだらした林道をひたすらスキーで登る。津奈木橋から3本目の橋から左岸の斜面を北に進み、鳩待峠手前のジグザグの斜面を突っ切って直登する。鳩待峠からの下りは最初は一気に滑り降りるが、川におりてからはひたすらラッセルである。雪は浅いが、ほとんど傾斜が無いので疲れる。途中で天気図をつけ、時間オーバーで山の鼻に着く。

3月26日（快晴）起床 4:00、出発 6:40 →尾根取付 8:35→1770m 14:05
 猫又川は雪に埋まっていた問題無く渡れた。二股の間の尾根に取り付くとすぐに深いラッセルの急登。こまめに先頭を交代しながら進む。1700mからは腰まで埋まる斜面を掘り進むようにして登った。雪が降り始め、視界も悪くなってきたので、2～3人テンがやっと収まる程度のスペースを見つけて幕営。

3月27日（吹雪）沈殿

3月28日（快晴）起床 4:00、出発 5:30→大白沢北の稜線 7:00→平ガ岳 11:20→デポ地点 13:15、発 13:35→1900m付近 15:30
 途中ちょっと雪崩そうな雪面をトラバースしながら稜線に出る。東大のワングルの赤布があり役に立った。1920mからの下りは雪庇が張り出しているの西側を巻くが、ひどいヤブこぎや吹きだまりの壁があり苦勞する。稜線に出ても雪の小山が連続して滑る時にスピードを出せず思うように進まない。途中で余分な荷物をデポして白沢山に差し掛かると、左右に壮大な景観が展開し広々とした尾根歩きが心地よい。平ガ岳は広すぎてどこに山頂があるのかよくわからず、適当な雪の上に「平ガ岳」の文字を書いて遊ぶ。目の前に真っ白に雪化粧した越後三山が横たわり、気軽に飛んで行けそうである。平ガ岳の下りはシュカブラがあり、思ったより滑りにくい。何度か転ぶがダイナミックな滑りを楽しむ。日が高くなるにつれ、腐った雪がスキーやシールにべったりと貼り付き、一歩一歩が重い。後半は転ぶ回数が目に見えて増えた洩沢の荷物を少し減らし、うだるような暑さの中、疲れきってテントを張る。

3月29日（曇り）起床 4:15、出発 6:30→スガ峰 7:30→1818m 8:45→日崎山 9:40→1668m 11:55
 スガ峰の登りでは横着してトラバース気味に行こうとしたが、迷いそうだし雪崩が怖かったので稜線に戻る。広い尾根を快適に辿って行くが、ガスっていていまい爽快さに欠ける。途中、すぐ目の前をカモシカが走って行き、目撃した洩沢は多いに感動する。尾根が別れていてわかりづらいところもあったが、古瀬が大きな溝に気付かずにスキーで直進し、洩沢の視界から消えるまで何事も無く進む。尻もちをついた古瀬が行動打ち切り宣言し、風の弱いところを選んでテントをはる。

3月30日（快晴）起床 4:00、出発 6:00→至仏取付 7:20→至仏山頂 11:05、発 11:40→山ノ鼻 13:40
 至仏の取付まではうんざりするような大きな吹きだまりを乗り越え、ヤブをこぎ、シールの利きもほとんど限界のクラストした斜面をトラバースしなければならなかった。やっとのことで至仏の直下まで来ると、登るのが嫌になりそうな、とてつもなく大きな山容が姿を現す。斜面はクラストしており、直登を避けて少し東寄りに登り過ぎてしまう。安定したところでスキーを外し、アイゼンを着ける。表面が固いので、体重を完全に乗せるとズボッと沈み、足に非常に負担がかかる。はっきりした稜線に出ると強烈な西風が吹き付け、スキーを付けたザックが風にあおられるので辛い。洩沢が古瀬の足跡をふらふらと辿り、時間がかかる。ムジナ沢の源頭部をトラバースして、山の鼻からの登山道に出ることにする。風は無いが、雪が深くラッセルが苦しい。途中でスキーをつけると嘘のように楽になりほどなく山頂に着く。丘のように大きな山の斜面が突然平坦になり、目の前に覆いかぶさる白い壁が消えて青い空が広がり、一瞬めまいのようなもの

を感じる。眼下に広がる光景は、ほとんど「地球」と言う次元で目に映る。広大な空間に、意識が吸い込まれそうになる。

至仏の下りでは初めて山スキーの豪快さを満喫できた。カッコよくターンを決めることはできなかったが、広大な木一本無い斜面を、気の向くままに滑ることができる。樹林帯に入ると、べたべたの重い雪に変わり、沢沢がバテ気味になるが、何とか休まず、一気に山ノ鼻まで下る。中途半端な時間で、燧ヶ岳に行くがどうか迷ったが、結局カットすることにし、この日は山ノ鼻にテントを張った。

3月31日（快晴）起床4:00、出発5:40→鳩待峠7:05、発7:20→ゲート9:45

予想通りの快晴。あと一日予備日が多かったらと悔やまれる。初日とは打って変わってばっちりトレースがついていて快調に進む。キツツキのドラミングを聞きながら鳩待に到着。シールを外して、しばらく沢沿いに行くが、がりがりに凍っていてこわい。すぐに林道に戻り、がりがりと耳触りな音を上げながらスピードを上げる。想像以上にスピードが出て、抑えるのに足に力が入るので膝が疲れた。ツボ足で頑張っているパーティーが残して行く足跡に苦勞する。最後の登り坂を越えながら、一年が終わったと言う実感をかみしめた（文責 沢沢）。